

「公衆衛生の転換—感染症との戦いから共生へ」

— 現代という文脈で読み解くエボラ出血熱、デング熱の流行 —

エボラ出血熱の流行が報道されてから、1 年が過ぎました。既に 1 万人以上の方々が貴い命を落とされていますが、あまりに急激に拡大したため、その脅威ばかりが強く印象に残る反面、何か釈然としな思いを抱いている人も多くいるのではないのでしょうか。

なぜ、このように簡単に命を落としてしまうのか。なぜ、特効薬はまだ開発されていないのか。大規模な流行は終息に向かっているのか。そのそも、なぜ、ここまで大流行したのか… こうした尽きない疑問は、私たちに、あるいは社会に、何を求めているのでしょうか？

今回は、長崎大学熱帯医学研究所 国際保健学分野 教授 山本 太郎(やまもと たろう)先生をお招きして、「公衆衛生の転換—感染症との戦いから共生へ」と題してご講演いただきます。ペスト、結核、ハンセン病、エイズ、インフルエンザ、エボラ出血熱、デング熱… こうした感染症に人類はどのように向き合ってきたのか、どう向き合うべきか、あるいは感染症を考えるうえで本質となることは何か、等々について伺いしたいと思います。

先生からのメッセージ

なぜ、ある感染症が流行したのか、あるいはするののかを、私たちはこれまで考えてきました。例えば、ヒトの移動、労働キャンプ、都市化、歪な性比などの要因が HIV を流行させたと考えてきたのです。しかし今、その「考え方」は「逆」ではないかと思いはじめています。病原体が流行するか否かを選択するのではなく、「ヒト社会」あるいは大きく「ヒト社会のあり方」が病原体を選ぶのではないかということです。別の言葉で言えば、ヒト社会での流行を望んで、いつの時代も、多くのウイルスや細菌が、恒常的な挑戦をしている。その中から、どのウイルスや細菌が流行するかを選択しているのは、ウイルスや細菌ではなく、「ヒト社会のあり方」なのではないかということです。

エイズの例で言えば、ウイルスは長く、ヒト社会へ、そのかすかな痕跡を残して消えていた。それが一九二〇年代初頭の社会状況の中で、偶然にも、足場を確保した。当時、ヒト社会へ、流行の機会を伺って挑戦していたウイルスや細菌は、HIV 以外にもあった。また、HIV も一九二〇年代初頭以外の年にさえ、何回かの偶発的な機会を持っていたはずである。すなわち、ある感染症がある時期の、ある状況下において流行するには、流行する理由——ヒト社会のあり方——があるのである。といったことかもしれない。

古くは、中世ヨーロッパの十字軍や民族移動によってもたらされたハンセン病。一八世紀産業革命が引き起こした環境悪化が広げた結核。植民地主義と近代医学の導入がもたらしたエイズ。こうした感染症は、私たち人類の「社会のありよう」が呼び込み、蔓延させた感染症と言えるのではないのでしょうか。

デング熱にしても、日本では七〇年ほど前に長崎、佐世保、広島、神戸といった西日本の港湾都市を中心に、二〇万人規模の感染者を出す大流行があった。当時は第二次世界大戦の最中で、南方からの帰還者がウイルスを持ち帰った。帰還兵によって持ち込まれたウイルスが、戦時下の防火水槽を繁殖場所として増殖したヒトスジシマカの存在下に大流行をした。現在に至るまで、温帯地域における、最大規模のデング熱流行だったのです。

エボラ出血熱についても、アフリカの都市化や医療制度の不備が指摘されているが、重要な

点は、現代社会に入り込んで流行しようと試みた、あるいは試みているウイルスや細菌はエボラだけではないということです。さまざまなウイルスや細菌のなかで、いま、西アフリカの社会に適合したのがエボラウイルスだったということになるのかもしれませんが。

エボラ出血熱が、初めて確認されたのは一九七六年。以来、コンゴ民主共和国やスーダンといった国を中心に二〇回以上もの小規模な流行が確認されている。山火事にたとえば、自然発火して燃えはじめたものの、雨が降って消沈したというようなボヤのようなものかもしれない。それが今回、一気に燃え広がというのが正しい理解かもしれません。

そうした意味では、今回のエボラ出血熱の流行もデング熱の流行も、現代という文脈の中において、「ヒト間社会のあり方」が感染症を選択しているといった文脈で理解すべきだろう、と思う。そうした話を講演できればと考えています。

皆様、ぜひご出席いただけましたら幸いです。尚、開催概要は下記の通りです。

2015年3月吉日
生命科学フォーラム事務局

— 記 —

日 時 2015年5月22日(金) 18:30~20:30 ※開場 18:00
会 場 日本記者クラブ(日本プレスセンター 9F TEL:03-3503-2721)
テーマ 「公衆衛生の転換-感染症との戦いから共生へ」
ー現代という文脈で読み解くエボラ出血熱、デング熱の流行ー
講 師 山本 太郎(やまもと たろう)
長崎大学熱帯医学研究所 国際保健学分野 教授
連絡先 〒852-8523 長崎県長崎市坂本1-12-4
長崎大学熱帯医学研究所 国際保健学分野
TEL 095-819-7869
y-taro@nagasaki-u.ac.jp
taro.daichi.yamamoto@gmail.com

<講師プロフィール>

【略歴】

1983年: 長崎大学医学部入学
1990年: 長崎大学医学部卒業
1990-91年 市立札幌病院救急部(札幌)
1991-95年: 長崎大学医学部大学院修了(ウイルス学専攻)
1995-98年: 東京大学大学院(国際保健学専攻)(東京)
1998-2000年 長崎大学熱帯医学研究所・助手(長崎)
その間、 JICA ジンバブエ国保健省・チーフアドバイザー(アフリカ)
2000-04年: 京都大学大学院医学研究科・助教授(京都)
その間、 ハーバード公衆衛生大学院(武見フェロー)(ボストン)
コーネル大学・ペイル医学校・客員准教授(ニューヨーク)
WHO(世界保健機関)・コンサルタント(マニラ)
ハイチ・カポジ肉腫・日和見感染症研究所・上席研究員(ハイチ)
2004-07年: 外務省・国際協力局・課長補佐(東京)
2007年: 長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野・主任(長崎)

【学位】